十一面観音立像

この十一面観音は、12 世紀頃に建てられた観音堂の主要なイメージだ。観音は同情の菩薩であり、しばしば仏教における慈悲の女神と言われる。彫像は 11 世紀に作られたが、比較的幅の広い肩や細い腰など、初期の天平文化（710–794）仏像の特徴が見受けられる。この像は、平等院の建設に先駆けて建てられた観音堂の一部であった可能性がある。

このように観音を表象する像において、十一の顔は、菩薩の悟りの道の 10 段階を反映していると考えられており、一番上の 11 番目は仏性を象徴する。しかし、他の十一面観音像とは異なり、この像には笑い顔の後ろ向きの頭はない。 167.2 cm の高さで、主に一つの木材から彫られたものだ。左手に蓮の花の入った花瓶を持ち、右手は下を向き祈りを聞き入れている。細かい葉の形のフレームが影を落とし、彫像自体の複雑な特徴を強調する。